



2024年度 第2回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類 長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2025年4月~9月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、6月頃の「離岸傾向」を除き、「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」もしくは「接岸傾向」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み」~「やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度

漁況(来遊水準)

- (1) マアジ : 東シナ海は沖合域は前年・平年並み、沿岸域は前年・平年並み。
日本海は前年並みで、平年を下回る。
- (2) マサバ : 東シナ海は沖合域は前年・平年並み、沿岸域は前年・平年並み。
日本海は前年並みで、平年を上回る。
- (3) ゴマサバ : 東シナ海は沖合域は前年並みで、平年を上回り、沿岸域は前年・平年を上回る。
- (4) マイワシ : 東シナ海は前年・平年を上回る。日本海は前年・平年を上回る。
- (5) ウルメイワシ : 東シナ海は前年並みで、平年を上回る。
- (6) カタクチイワシ : 東シナ海は前年・平年を下回る。

※「前年」は2024年4月~9月。「平年」は過去5年の平均値。

※東シナ海の予報対象は上記の全6種、日本海の予報対象はマアジ、マサバ、マイワシ

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当 : 漁況 : 浮魚資源部(長崎) 黒田、依田、高橋

海況 : 海洋環境部(長崎) 渡邊、種子田、井桁

電話 : 095-860-1600(長崎)、ファックス : 095-850-7677(長崎)

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

予報対象海域

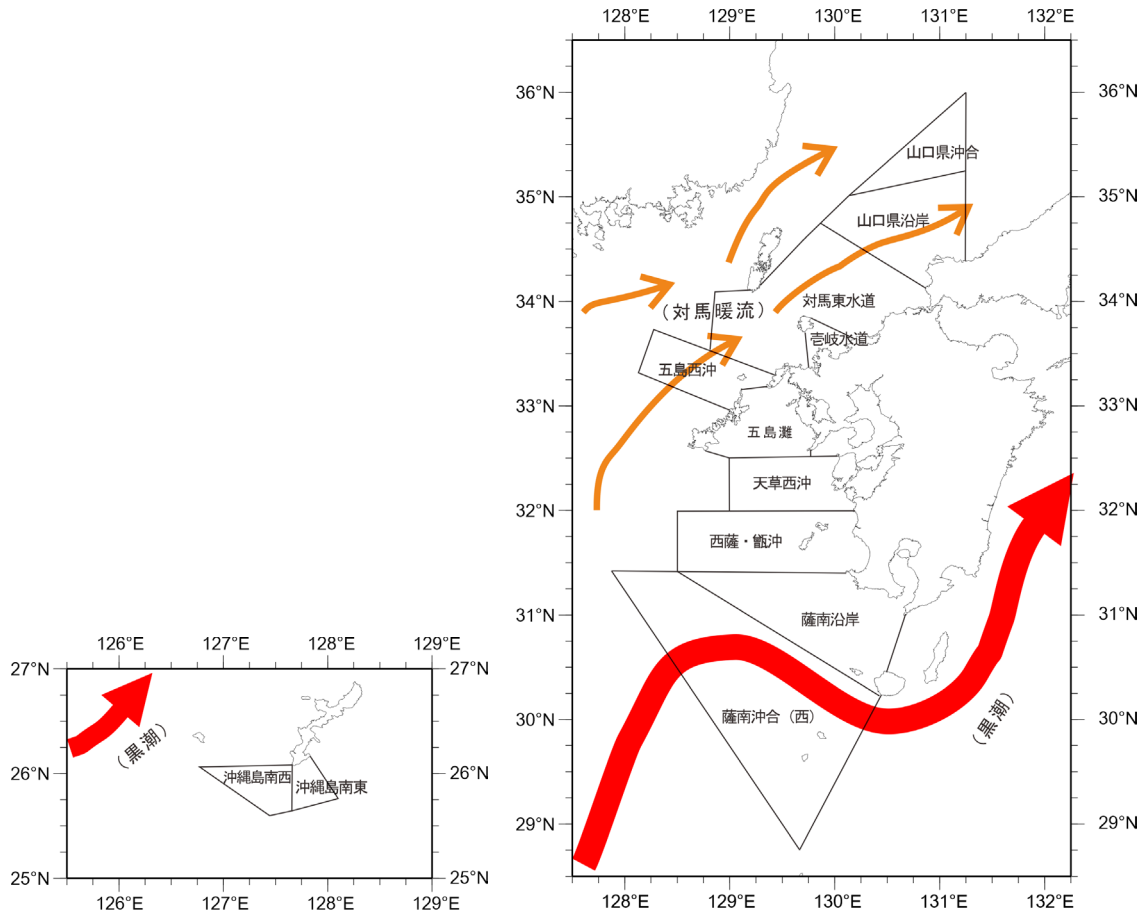


図1. 海況 (沿岸)

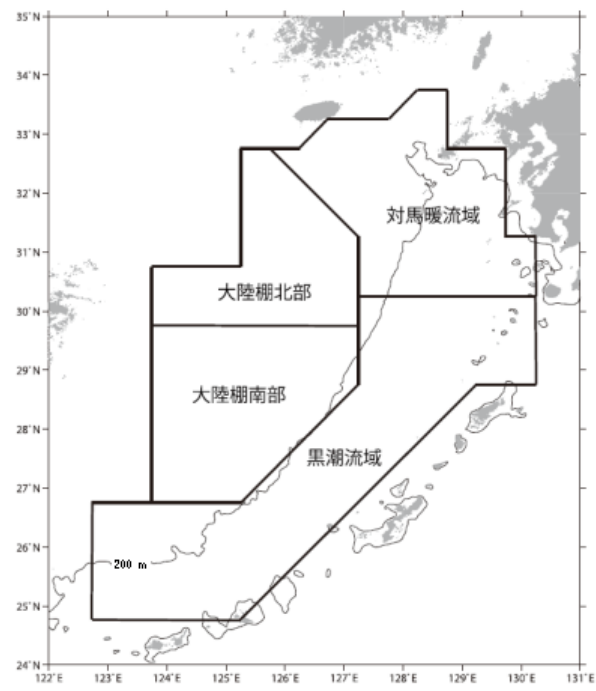


図2. 海況 (沖合)

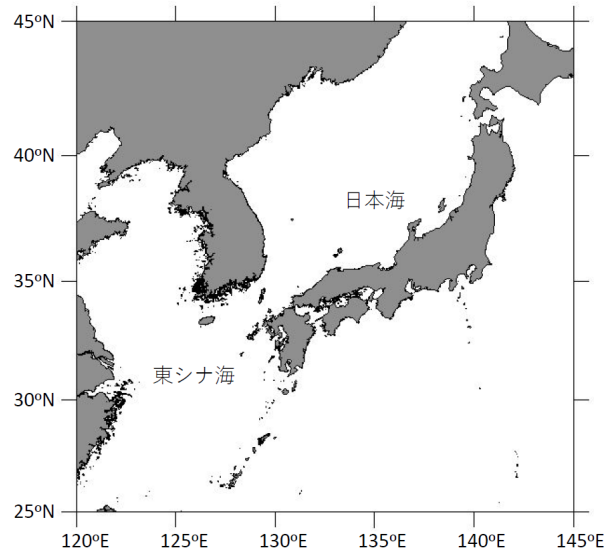


図3. 漁況

東シナ海：鹿児島県から山口県までの沿岸とその沖合を含む海域

日本海：島根県から青森県までの沿岸とその沖合を含む海域（陸奥湾を含む）

西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2025年4月～9月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返すが、6月頃の「離岸傾向」を除き、「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」もしくは「接岸傾向」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域、大陸棚上、黒潮流域は「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2024年10月～2025年3月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：10・11月「はなはだ高め」、12・1月「平年並み」、2月「やや低め」。

南部：10月「はなはだ高め」、11月「かなり高め」、12月「平年並み」、1・2月「やや低め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、10月は「接岸傾向」、11月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」、12月は「接岸傾向」、1・2月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」で経過。

(2) 海面水温

10・11月「はなはだ高め」、12・1月「平年並み」、2月「かなり低め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沿岸：10月「はなはだ高め」、11月「平年並み」、12月「やや高め」、1月「やや低め」、2月「かなり低め」。

対馬東水道：10月「はなはだ高め」、11月「やや高め」、12月「かなり高め」、1・2月「平年並み」、3月「かなり低め」。

壱岐水道：10月「平年並み」、12月「かなり低め」、1月「やや低め」、2・3月「かなり低め」。

五島西沖：11月「平年並み」、3月「かなり低め」。

五島灘：11月「かなり高め」、2月「かなり低め」、3月「平年並み」。

天草西沖：10月「かなり高め」、3月「やや低め」。

西薩・甑沖：3月「平年並み」。

薩南沿岸：3月「平年並み」。

薩南沖合：3月「平年並み」。

沖縄島南東：10月「かなり高め」、11月「はなはだ高め」。

沖縄島南西：10・11月「かなり高め」。

(2) 表層塩分

山口県沿岸：10月「やや低め」、11・12月「かなり低め」、1・2月「平年並み」。

対馬東水道：10・11月「やや低め」、12月～3月「平年並み」。

壱岐水道：10月「やや低め」、12月～3月「平年並み」。

五島西沖：11・3月「平年並み」。

五島灘：11・2・3月「平年並み」。

天草西沖：10・3月「平年並み」。

西薩・甑沖：3月「平年並み」。

薩南沿岸：3月「平年並み」。

薩南沖合：3月「やや低め」。

沖縄島南東：10月「やや低め」、11月「かなり低め」。

沖縄島南西：10・11月「やや低め」。

3. 現況（2025年3月中旬）

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「やや低め」、南部「平年並み」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」。海面水温は「やや高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度

「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度

「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度

「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

マアジ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚（ゼンゴ・小・中銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部が漁場となる。

(3) 魚体：15～22cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と22cm以上の2歳魚以上（小・中・大銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2024年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2024年11月～2025年1月）および見通し（2025年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準だったが、1980・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で推移し、2023年の資源量は38万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のマアジの漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであった。2005年～2017年は11万～14万トンであったが、2018年以降は10万トンを下回り、2023年は7万トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2024年11月～2025年1月の大中型まき網漁業のマアジの主な漁場は、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業の漁獲量は1千トンで前年（2023年11月～2024年1月、3千トン）、平年（3千トン）を下回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を上回り、平年並みだった（表1）。漁獲の主体は17～25cmの1歳魚（2023年級群）と17cm以下の0歳魚（2024年級群）であった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表2）。漁獲の主体は17～22cmの1歳魚（2023年級群）、17cm以下の0歳魚（2024年級群）であった。

3. 今後の見通し

資源評価や直近の漁況より、2023年級群の豊度は2022年級群を下回るとみられる。調査船調査の結果やこれまでの漁況から、2024年級群の豊度は2023年級群を上回るとみられる。2025年級群の豊度の評価は難しいが、資源評価における親魚量は安定していることから、2024年級群並みと見積もるのが妥当であろう。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期には1歳魚（ゼンゴ銘柄）と2歳魚（小・中銘柄）が漁獲の主体で、3歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。この時期はマアジの盛漁期にあたり、沖合域、沿岸域ともに近年漁獲量は安定している。全体の豊度は前年並みとみられることから、沖合域、沿岸域ともに来遊量は前年・平年並みと考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期には1歳魚（ゼンゴ銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。この時期はマアジの盛漁期にあたるが、近年漁獲量は減少傾向にある。全体の豊度は前年並みとみられることから、来遊量は前年並みで、平年を下回ると考えられる。

マサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、五島西、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）と33～35cmの2歳魚（小銘柄）が、漁期後半は1・2歳魚に加えて、25cm以下の0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部～中部が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）と33cm以上の2歳魚以上（小・中銘柄）が、漁期後半は1・2歳魚に加えて、25cm以下の0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2024年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2024年11月～2025年1月）および見通し（2025年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、60万トン前後に留まった。近年は、2013年に46万トンまで減少したが、2014年以降、高い加入量に支えられて資源量は増加し、2023年は71万トンと推定された。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降は概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2019年以降8万～10万トンであり、2023年は10万トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2024年11月～2025年1月の大中型まき網漁業のマサバの主な漁場は対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2万7千トンで前年（2万1千トン）、平年（1万4千トン）を上回った。九州主要港の相場情報に基づくマサバの漁獲量は前年並みで、平年を上回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表1）。漁獲の主体は18～27cmの0歳魚（2024年級群）と28cm以上の1歳魚（2023年級群）以上であった。

ただし、大中型まき網漁業や長崎県の沿岸漁業では、陸上の処理能力やTACによる制約などのためさば類の漁獲量を規制した期間があった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表2）。漁獲の主体は21～27cmの0歳魚（2024年級群）と28cm以上の1歳魚（2023年級群）以上であった。ただし、大中型まき網漁業および島根県の沿岸漁業では、陸上の処理能力やTACによる制約などのためさば類の漁獲量を規制した期間があった。

3. 今後の見通し

今年度の資源評価結果や2024年秋以降の小銘柄の漁況から判断すると、2023年級群の豊度は2022年級群並みとみられる。2024年秋以降の豆銘柄の漁況から判断すると、2024年級群の豊度は2023年級群並みとみられる。2025年級群の豊度の評価は難しいが、資源評価における将来予測結果から判断すると、2024年級群並みと考えられる。0～2歳魚が漁獲の主体であることから、系群全体の豊度は前年並みと考えられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらぬものの、安定した漁獲がある。沖合域、沿岸域とも、前半は1・2歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度が前年並みとみられることや2024年秋以降の好漁から判断して、沖合域、沿岸域とも来遊量は前年・平年並みと考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらぬが、過去3年のように平年を大きく上回る年もある。前半は1歳魚以上（豆～中銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲の主体となる0～2歳魚の豊度は前年並みとみられる。2024年秋以降の好漁から判断して、来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

ゴマサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）、3歳魚（2022年級群）。魚の大きさは尾叉長で表示。

(1) 来遊量：沖合域は前年並みで、平年を上回る、沿岸域は前年・平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、五島灘・薩南、鹿児島県の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では15～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では25～37cmの1歳魚以上（豆～中銘柄）が漁獲される。

注：「前年」は2024年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2024年11月～2025年1月）および見通し（2025年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降、10万～20万トン程度で推移し比較的安定していた。近年は、2015年以降増加傾向を示し、2018年には21万トンに達したが、2019年に急減した。2021年から再び増加し、2023年は18万トンと推定された。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代から概ね5万トン前後で推移したが、2013年以降は3万トン前後の低い水準で推移した。2018年に増加したものの、2020年は1973年以降で過去最低の2万トンであった。その後増加傾向にあり、2023年は3万9千トンであった。

2. 漁況の経過

2024年11月～2025年1月の大中型まき網漁業のゴマサバの主な漁場は、東シナ海中部と五島灘・薩南、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2万7千トンで前年（2万1千トン）、平年（1万4千トン）を上回ったが、九州主要港の相場情報に基づくゴマサバの漁獲量は前年・平年を下回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表1）。20～40cmの0歳魚（2024年級群）以上が漁獲された。

ただし、大中型まき網漁業や長崎県の沿岸漁業では、陸上の処理能力やTACによる制約などのためさば類の漁獲量を規制した期間があった。

3. 今後の見通し

資源評価結果やこれまでの漁況から判断すると、2023年級群の豊度は2022年級群並み、2024年級群の豊度は2023年級群並みとみられる。2025年級群の評価は難しいが、資源評価における将来予測結果から判断すると、2024年級群並みと考えられる。

例年、4月～9月期は沖合域では1・2歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。過去2年の漁況は、平年を上回っていた。漁獲量の大半を占める1歳魚の年級豊度は前年並みであることから、沖合域の来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。沿岸域では1歳魚以上（豆～中銘柄）が主に漁獲される。沿岸域の来遊量は、直近の漁況を考慮すると、前年・平年を上回ると考えられる。

マイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、棒受網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）、3歳魚（2022年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：前年・平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は主に15～22cmの1～3歳魚（中・大羽銘柄）が、後半は15cm以下の0歳魚（小・中羽銘柄）が主体に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年・平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期前半に日本海西部～中部、後半に日本海西部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は16～22cmの1～3歳魚（中・大羽銘柄）主体に、後半は15cm以下の0歳魚（小・中羽銘柄）が漁獲される。

注：「前年」は2024年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2024年11月～2025年1月）および見通し（2025年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、2004年～2012年にかけて増加に転じ、2013年以降横ばい傾向にあったが、2019年から再び増加に転じ、2023年の資源量は133万トンと推定された。

東シナ海・日本海における我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年までは100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2011年に急激に増加して4万3千トンとなった。その後も増加傾向にあり、2023年は11万6千トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2024年11月～2025年1月の鹿児島県～山口県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年・平年を上回った（表1）。海域別に見ると、長崎県以南において前年・平年を上回った。漁獲の主体は、11～16cmの0歳魚と17～22cmの1歳魚以上であった。

(2) 日本海

2024年11月～2025年1月の島根県～青森県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年・平年を上回った（表2）。漁獲の主体は10～16cmの0歳魚と16～21cmの1歳魚以上であった。ただし、大中型まき網漁業および島根県の沿岸漁業では、陸上の処理能力による制約などによりマイワシの漁獲量を規制している。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2022年級群の豊度は2021年級群並みで、2023年級群の豊度は2022年級群よりも大きいとみられる。また、当歳魚を対象としたトロール調査より、2024年級群の豊度は2023年級群並みとみられる。2025年級群の豊度の評価は難しいが、親魚となる1歳魚以上の来遊状況を示す直近の漁況から判断すると、2024年級群並みか上回ると考えられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期の前半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲される。近年の漁況は、資源豊度の増加に伴い漁期が長期化する傾向にあり、漁期前半における1歳魚以上の漁獲量と漁期後半における0歳魚の漁獲量に強く影響される。直近の漁況より、2025年の親魚の来遊量は好漁だった前年を上回ると考えられることから、東シナ海の前年・平年を上回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期の前半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲される。近年の漁況は、漁期前半における1歳魚以上の漁獲量と漁期後半における0歳魚の漁獲量に強く影響される。年級豊度と直近の漁況を考慮すると、漁期前半における来遊量を構成する1～3歳魚（2022～2024年級群）の豊度は前年同期の1～3歳魚（2021～2023年級群）の豊度を上回ると考えられることから、日本海における来遊量は前年・平年を上回ると考えられる。

ウルメイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）。
魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期の後半が漁獲の主体となる。長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15cm以上の1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2024年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2024年11月～2025年1月）および見通し（2025年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海における資源量は1976年から1984年にかけて減少したのち、1990年代初めまで増加に転じた。1995年には資源量は10万トンを超えたが、その後再び減少し、2003年に2万5千トンとなった。2003年以降は変動しながら増加し、2015年には14万3千トンに達したが、その後減少して、2023年の資源量は11万6千トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国の漁獲量は、1976年から1998年まで毎年2万トンを超える漁獲があった。特に1980年代後半から1990年代前半までは4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半から2000年にかけて1万トンまで減少した。2001年以降は増加傾向にあり、2013年と2016年には5万トンを超える漁獲量となった。2017年以降の漁獲量は3万1千～3万9千トンの間で変動したが、2020年は1万9千トンと大きく減少した。2021年以降は漁獲量が再び増加し、2023年は1976年以降で最高となる6万2千トンとなった。

2. 漁況の経過

2024年11月～2025年1月の鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表1）。漁獲の主体は15～20cmの0歳魚（2024年級群）を主体に20cm以上の1・2歳魚（2023・2022年級群）も漁獲された。

3. 今後の見通し

例年、4月～9月期には1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半に0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲の主体となる。2024年11月～2025年1月の漁況の経過、東シナ海における産卵量および中層トロールの調査結果から、2024年級群の豊度は2023年級群並みとみられる。2025年級群の豊度を予測するのは困難であるが、直近の漁況から2024年級群並みと考えられる。したがって、全体の来遊量は好漁だった前年並みで平年を上回ると考えられる。

カタクチイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））、1歳魚（2024年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：4月～6月が主体となる。長崎県南部以南の沿岸域が主な漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は5cm以上の0・1歳魚（小羽・中羽・大羽銘柄）が主体で、漁期後半は4～8cmの0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2024年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2024年11月～2025年1月）および見通し（2025年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1977年以降、2020年まで増減を繰り返しながら11.2万～42.6万トンで推移した。2009年以降は緩やかな減少傾向にあり、2022年は過去最低となる8.4万トンと推定されたが、2023年は漁獲圧が低下し、10.6万トンとやや回復した。

東シナ海・日本海における我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1997年を除いて1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。その後2005年～2008年には増加したが、2009年～2013年には減少し、2014年・2015年に増加して6万1千トンであった。2016年以降は減少傾向にあり、2023年には2万9千トンとなった。

2. 漁況の経過

2024年11月～2025年1月の鹿児島県～山口県地先における漁獲量は前年・平年を下回った（表1）。2024年11月の漁獲の主体は、5cm以下の0歳魚秋季発生群（2024年級群）と10～15cmの1歳魚（2023年級群）であった。12月以降については、不漁の影響もあり体長に関する情報は現在のところほとんど得られていない。

3. 今後の見通し

例年、4月～9月期の前半は0・1歳魚（小羽・中羽・大羽銘柄）が、後半は0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が主体に漁獲される。2024年4月～9月の漁況等から、2024年の春季発生群の豊度は2023年の春季発生群を下回るとみられる。また2024年10月～2025年1月の漁況等から、2024年の秋季発生群の豊度は2023年の秋季発生群を下回るとみられる。2025年の春季発生群の豊度を予測するのは困難であるが、2024年の春季発生群並みであると仮定すると、全体の来遊量は不漁であった前年をさらに下回り、平年も下回ると考えられる。

表1. 東シナ海における沿岸域の漁況経過（2024年11月～2025年1月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
鹿児島	漁獲量は1,163トンで、前年・平年を上回った（前年比159%、平年比141%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は378トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比722%、平年比82%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は1,805トンで、前年・平年を上回った（前年比208%、平年比186%）。
熊本 牛深港	漁獲量は85トンで、前年・平年を下回った（前年比52%、平年比78%）。	漁獲量は273トンで、前年・平年を下回った（前年比42%、平年比48%）。	
長崎	地域により差があるが、中型まき網の漁獲量は2,710トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比123%、平年比85%）。	地域により差があるが、中型まき網の漁獲量は5,448トンで、前年・平年並みであった（前年比80%、平年比111%）。	
佐賀	漁獲量は45トンで、前年・平年を下回った（前年比35%、平年比45%）。	漁獲量は6トンで、前年・平年を下回った（前年比46%、平年比22%）。	
福岡	代表港中型まき網漁獲量は104トンで、前年・平年を上回った（前年比306%、平年比173%）。漁獲のうち、小銘柄が39%、中銘柄が40%であった。棒受網での漁獲はなかった。小型定置網の漁獲量は2トンで、前年・平年を下回った（前年比16%、平年比23%）。	代表港中型まき網漁獲量は55トンで、前年・平年を上回った（前年比626%、平年比260%）。漁獲のうち、マメ銘柄が主体であった。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は44トンで、前年・平年を下回った（前年比29%、平年比58%）。
山口	中型まき網漁業の漁獲量は151トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比316%、平年比119%）。	中型まき網漁業の漁獲量は116トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比353%、平年比113%）。	

注：「前年」は2023年11月～2024年1月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
鹿児島	主要4港のまき網による漁獲量は512トンで、前年・平年を上回った（前年比529%、平年比360%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は17トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比299%、平年比76%）。	主要4港のまき網による漁獲量は436トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比73%、平年比94%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は36トンで、前年・平年を下回った（前年比66%、平年比76%）。	主要4港のまき網による漁獲量は233トンで、前年・平年を上回った（前年比281%、平年比222%）。北薩海域における棒受網による漁獲はなかった。
熊本 牛深港	漁獲量は1,188トンで、前年・平年を上回った（前年比776%、平年比1,954%）。	漁獲量は620トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比89%、平年比140%）。	漁獲量は267トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比106%、平年比194%）。
長崎	地域により差があるが、中型まき網の漁獲量は1,804トンで、前年・平年を上回った（前年比2,153%、平年比1,347%）。	地域により差があるが、中型まき網の漁獲量は1,897トンで、前年・平年を上回った（前年比491%、平年比244%）。	地域により差があるが、中型まき網の漁獲量は211トンで、前年・平年を下回った（前年比29%、平年比37%）。
佐賀	漁獲量は1トン未満で、前年・平年を下回った（前年比1%、平年比2%）。	漁獲量は1トン未満で、前年・平年を下回った（前年比3%、平年比2%）。	漁獲はなかった。
福岡	代表港中型まき網および棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は1トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比89%、平年比10%）。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網および棒受網での漁獲はなかった。
山口	中型まき網・棒受網・すくい網での漁獲はなかった。	湊地区の棒受網・すくい網での漁獲はなかった。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量は小中羽、シラス主体に7トンで、前年・平年を下回った（前年比31%、平年比6%）。

注：「前年」は2023年11月～2024年1月、「平年」は過去5年の平均値。

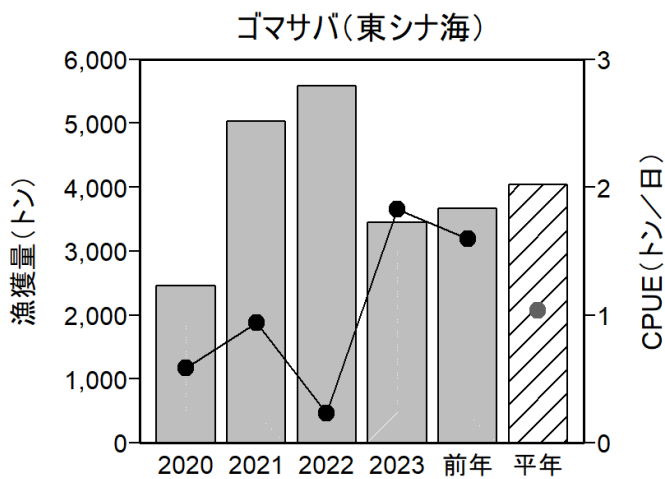
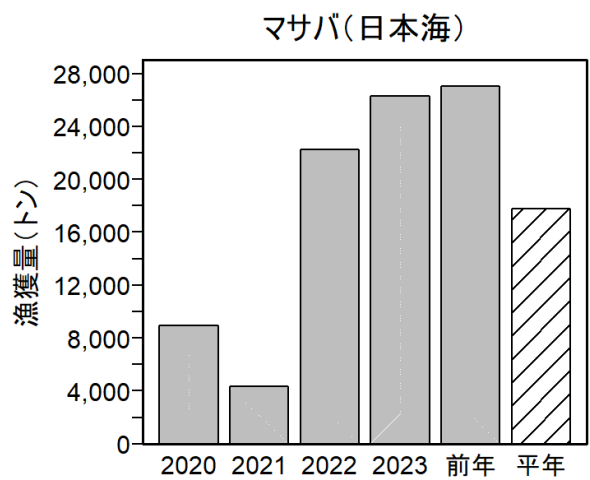
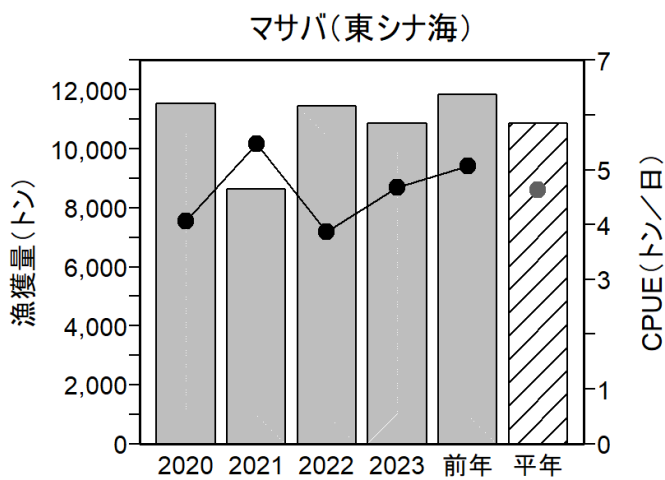
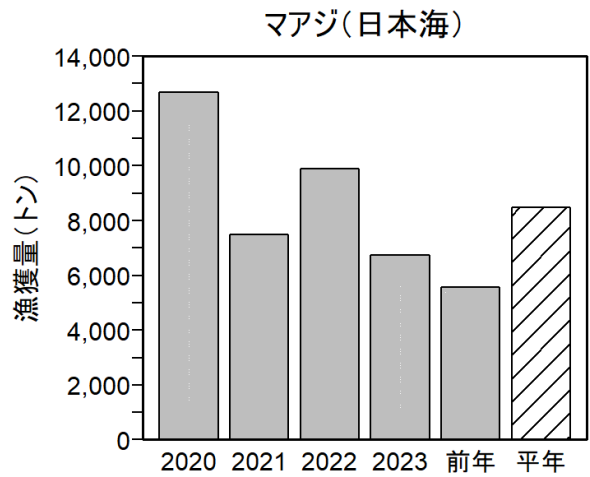
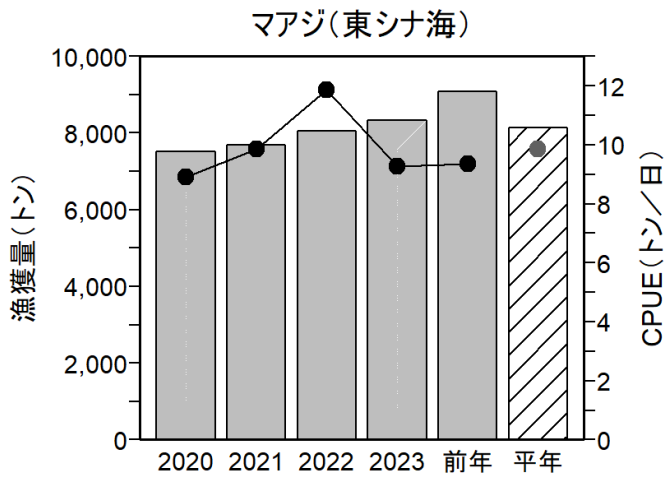
山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表2. 日本海における沿岸域の漁況経過（2024年11月～2025年1月）

	マアジ	マサバ	マイワシ
島根	漁獲量は18トンで、前年・平年を下回った（前年比18%、平年比12%）。	漁獲量は100トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比606%、平年比92%）。	漁獲量は0.5トンで、漁獲がなかった前年を上回り、平年を下回った（平年比28%）。
鳥取	漁獲量は3,127トンで、前年・平年を上回った（前年比132%、平年比182%）。	漁獲量は12,985トンで、前年・平年を上回った（前年比127%、平年比221%）。	漁獲量は1,752トンで、漁獲がなかった前年を上回り、平年も上回った（平年比1,189%）。
兵庫	漁獲量は18トンで、前年・平年並みであった（前年比94%、平年比95%）。	漁獲量は8トンで、前年・平年を上回った（前年比316%、平年比342%）。	漁獲量は0.6トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比24,546%、平年比69%）。
京都	漁獲量は83トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比80%、平年比72%）。	漁獲量は50トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比617%、平年比107%）。	漁獲量は1.6トンで、前年・平年を上回った（前年比1,017%、平年比132%）。
福井	前年並みで、平年を下回った（前年比83%、平年比39%）。	前年・平年を上回った（前年比250%、平年比444%）。	前年を上回り、平年を下回った（前年比459%、平年比1%）。
石川	前年を上回り、平年を下回った（前年比224%、平年比51%）。	前年を上回り、平年並みであった（前年比251%、平年比109%）。	前年を上回り、平年を下回った（前年比201%、平年比69%）。
富山	漁獲量は898トンで、前年・平年を上回った（前年比617%、平年比307%）。	漁獲量は215トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比210%、平年比81%）。	漁獲量は7トンで、漁獲がなかった前年を上回り、平年も上回った（平年比202%）。
新潟	漁獲量は169トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比268%、平年比110%）。	漁獲量は237トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比97%、平年比71%）。	漁獲量は10トンで、漁獲がなかった前年を上回り、平年も上回った（平年比4,544%）。
山形	漁獲量は14トンで、前年・平年並みであった（前年比115%、平年比101%）。	漁獲量は4トンで、前年・平年を上回った（前年比260%、平年比142%）。	漁獲はなかった。
秋田	漁獲量は40トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比73%、平年比87%）。	漁獲量は17トンで、前年・平年を上回った（前年比185%、平年比224%）。	漁獲量は0.04トンで、前年・平年を下回った（前年比1%、平年比3%）。
青森	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は47トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比138%、平年比65%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は174トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比72%、平年比94%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は191トンで、前年・平年を上回った（前年比721%、平年比125%）。

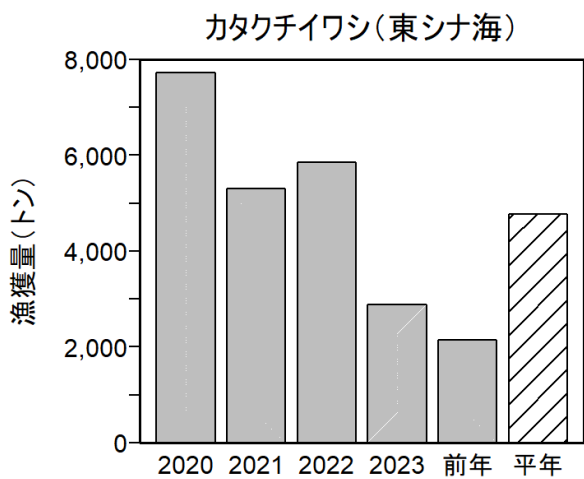
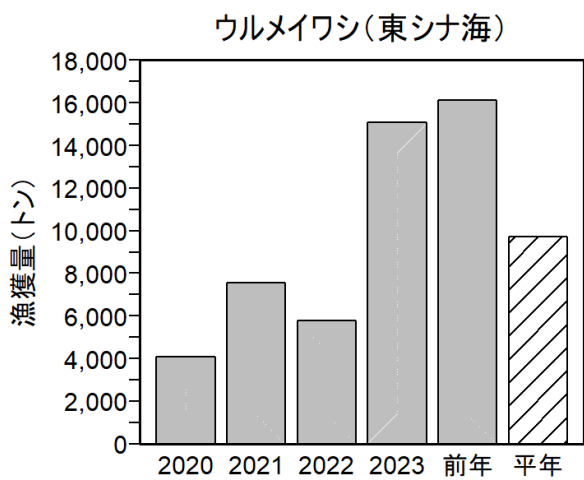
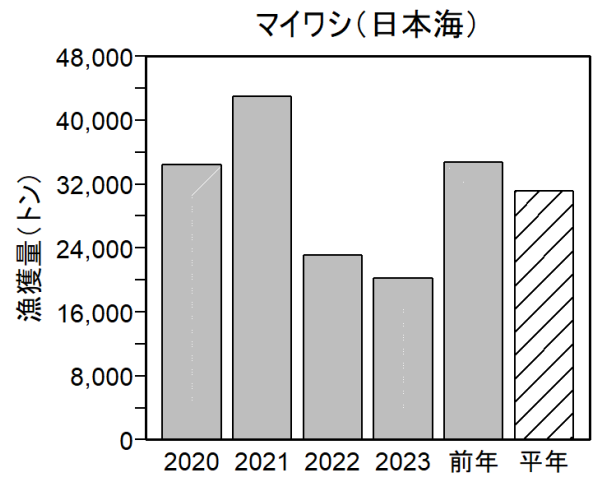
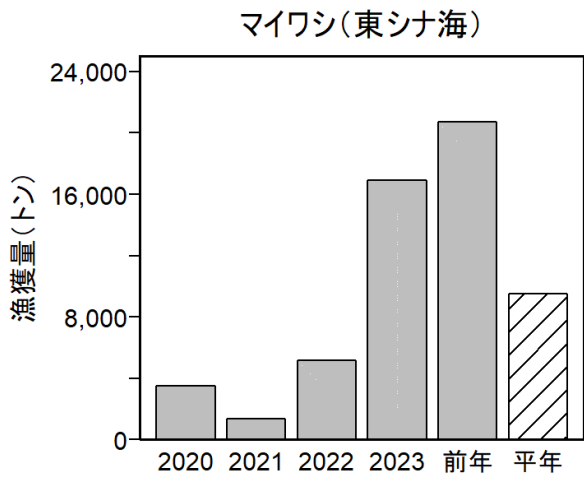
注：「前年」は2023年11月～2024年1月、「平年」は過去5年の平均値。

日本海において水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



今後の見通し参考図 (マアジ、さば類)

沿岸漁業の漁獲量(沿岸漁況の指標の一つ; 棒グラフ)と大中型まき網漁業の1日当たりの漁獲量(沖合漁況の指標の一つ; 折れ線グラフ、CPUE)。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、鹿児島県～山口県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県(枕崎港・阿久根港)のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量(ゴマサバを含むが主にマサバ)の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県(枕崎港・阿久根港)のゴマサバ漁獲量の合計値。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要漁業(大中型まき網漁業を含む)の漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。



今後の見通し参考図 (いわし類)

沿岸漁業の漁獲量。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要漁業（大中型まき網漁業を含む）の漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	鳥取県水産試験場
秋田県水産振興センター	島根県水産技術センター
山形県水産研究所	山口県水産研究センター
新潟県水産海洋研究所	福岡県水産海洋技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	佐賀県玄海水産振興センター
石川県水産総合センター	長崎県総合水産試験場
福井県水産試験場	熊本県水産研究センター
京都府農林水産技術センター 海洋センター	鹿児島県水産技術開発センター
兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
	(取りまとめ機関)
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所